

2017岡山市芸術祭

# 岡山市民の文芸

第49回岡山市民文芸祭受賞作品

# 一般の部

## 【現代詩】

◎岡山市長賞

### いくたびの藤

長島 恵美子

郊外の友人からクール便が届いた  
小箱の中は甘い香りの山藤の小房が五つ  
「押し花にして」とメッセージがある  
幼稚園のころの記憶はほとんどない  
なのに藤組で  
名札が藤色だったことだけは  
妙に記憶している  
色彩として心をとらえた最初の記憶だろう

高校で一番好きだった場所は  
藤棚の下である

集会所から続く藤棚の下はベンチが並び  
生徒たちの憩いの場所になっていた  
特に土曜日の午後

部活の書道教室に向かう前

友人と炭酸飲料を飲みながらの  
談笑はリフレッシュタイムだった

藤の花との縁は

夫との出会いでさらに強いものとなつた  
和気町の藤公園の近くで生まれ育つた夫と  
お見合いをしたのだ

藤祭りでにぎわう公園を夫と二人で訪れた  
清麻呂太鼓の音が力強くとどろく  
花の香りは

母校の藤の香りとオーバーラップした  
藤の花色は幼いころから気になる色で  
思春期を象徴する花だつた  
もうすぐ住み慣れた岡山を発つ  
期待と不安が胸の中を去来していた

ピンセットを通して触れる花びらの  
一枚一枚が  
いくたびの藤の花の記憶を呼び起こす  
緑まばゆい五月の山で摘み取られ  
私の元にやつてきたけなげな藤の花  
空色の和紙に花びらをそつと並べていく  
せめて額の中では  
満開の姿で咲き続けられるよう祈りつつ

含羞草

おじぎそう

玉上由美子

お早うと いうと  
お早うと 応える  
今日はと いうと  
今日はと 応える  
お休みと いうと  
お休みと 応える  
お休みと 応える

応えながら  
内気過ぎるものたちは  
しゆるしゆると体を閉じて  
深々とお辞儀する

たとえ  
触らないように触つても  
動かないように動いても  
揺れないように揺れたとしても  
垂れ下がる  
下に向けて 垂れ下がる

風にさえ  
温度にさえ  
明るさにさえ  
動かされ 支配され続けて

あたかも  
在るものさえも無いかのように  
そつとそつと形作られた  
薄緑色の茎から  
申し訳なさそうに覗く棘たちの声は  
私の心に浸みてくる  
「囚われたくないのよ」

枝は地面を這いながら  
横へ横へと延びてゆく  
球状淡紅色の花たちは  
次々と軟らかく咲き続けて

ため息さえも溶け込んでしまいそうな  
日の暮れた闇の中でだけ  
自分自身の眠りにつく

## 空を見上げては

栗原由美

おとうさん  
天空から私が見えますか

玉葱の収穫をしています  
昨日は草刈をしました  
少しは上手になりました  
来週は田植えです

それが終われば  
ジャガイモの収穫が待っています  
先日は久しぶりに雨が降ったので  
水やりをしなくてすみました  
その代わりに  
雑草がまた勢いよく伸びてきました

農家の長男に嫁ぐことは反対されました

だから

おとうさんが生きている間は

愚痴は言えませんでした

今なら言つてもいいですか

腰が痛いです 足も痛いです

暑いです キツイです

守るつて大変なことだと知りました

あの時 おとうさんが

私を守ろうとしたことも

今 知りました

飛行機雲が西に流れて行きました

励ましてもらつてもいいですか  
誉めてもらつてもいいですか  
おとうさん

私  
頑張っていますよ

## 桔梗色の空

岡

由美子

そこには 細長い五枚の棚田が  
あつたはずなのだが・・・  
目の前に広がるのは 一面の葛の原  
縦横無尽に つるを伸ばしている  
その勢いに 吞み込まれそうだ

こここの田の米はおいしいと  
祖父の自慢だった棚田

収穫の秋 家族総出で農作業をした  
中学生の兄も 小学生の私も  
大切な働き手だった

桔梗色の空の下

脱穀機のエンジン音が 山々にこだまする  
ダツ ダツ ダツ

稻を扱くのは 祖父と父  
ザーツ ザーツ ザーツ

穂が 勢いよく 叻かますに流れ込む

稻の山は どんどん低くなつていく  
母と子供たちとで 稲束を肩に担いで運ぶ  
扱き終えた稻藁を集めるのは

祖母の役割

田んぼの隅っこに 三角帽子の藁ぐろが立つ

六人の連携プレーで

稻扱きは 終了

あぜ道に座り ほおばる塩にぎりが  
おいしかった

農作業の疲れは スーツと引いて  
大仕事を為し終えた喜びが 身を包んだ

耕作放棄の田は

見紛うほどに 姿を変えてしまった  
少子化 高齢化の進むなかで

先祖から受け継がれてきた土地が  
次々と 山に還つていく

無人となつた家屋も 枯ち果てた末に  
原野に還つていく

故郷の現実を前に 呆然と立ち尽くす  
仰ぎ見れば

昔と少しも変わらない  
桔梗色の空が 広がつていて

## 親父の野球帽

うさぎのシップ

### 親父の野球帽

カツと照りつける真夏の太陽  
キラリと光る親父の首筋  
真っ白いヤンkeesのキャップ  
ぼくと親父、渾身のキャッチボール  
親父の顔は笑ってた

### 親父の野球帽

枯葉の小道とリハビリ散歩  
汗とほこりにまみれた親父の皺顔  
黄ばんだヤンkeesのキャップ  
ぼくと親父、温心のキャッチボール  
親父の顔は笑ってた

### 親父の野球帽

救急車に乗つて夜空の星を見つめ  
「ああ、満天の星は本当に綺麗だね」  
破れかけたヤンkeesのキャップ  
ぼくと親父、最後のキャッチボール  
親父の顔は笑ってた

### 親父の野球帽

ひつそりと家族を見守るように  
壁に掛かったヤンkeesのキャップ  
僕と親父、思心のキャッチボール  
もう一度、親父に会いたいな  
親父の写真は笑つてた

## 【短歌】

### ◎岡山市長賞

商いを三十分伸ばして豆腐二丁売れたる夜のビールはうまし

岩崎弘舟

研修のネームプレートを胸につけレジ打つ陳さん笑顔がかたい

竹本喜子

パヤ・パヤ・パヤ「恋のフーガ」は二重唱八十路過ぐればアルトで歌ふ

若林とし子

「墓じまい」広辞苑にも無き言葉テレビは映す山積みの墓

石原純子

雀おどしの空缶竿の先に鳴り夏はゆつくり立ち枯れてゆく

山本照子

## 【俳句】

### ◎岡山市長賞

該当作品なし

### ◇岡山市教育委員会教育長賞

円周の途切るるあたり蝸牛

小西瞬夏

南瓜煮て祝ふ夫婦の五十年

佐藤宣枝

石段の終の一段風薰る

三垣博

跪き客待つ駱駝梅雨寒し

高木幸子

## 【川柳】

### ◎岡山市長賞

何回も転んだ先はきっと海

藤成操江

野菊咲く古里の空今も青

久本にい地

ゆずり合う糸で余生を編んでゆく

伊藤寿子

私を消されたようなマイナンバー

松元慶子

生命育み生命を奪う水の精

小神緑

## 【随筆】

◎岡山市長賞

### サプライズプレゼント

東 めぐみ

七月下旬のある日、私は自宅最寄りのJR駅のホームにいた。息子が通う高校で三者面談があるからだ。息子は補習があるため、いつものように既に朝、登校している。

高校に近い駅までは電車で二十分余りかかる。ガタゴトと一両編成の電車に揺られてゆくのも良いものである。私は電車の旅が好きで、新幹線を利用するべきところでも好んで在来線を使う。

十二時十二分の電車に乗るつもりだったのだが、その少し前に別の電車がホームに入ってきた。アナウンスによれば、その電車は途中停まりらしい。周囲を見渡すと、私以外は全員、その電車に乗り込んだ。一人だけホームに取り残されるのも恥ずかしい気がして、慌てて乗り込む。

まもなく発車し、十数分後、私は目的地よりは数駅手前の駅で降りた。乗客は皆、急ぎ足で駅舎を後にしてゆく。私は一人、陸橋を渡り向かいのホームへ渡った。もちろん、誰もいない。携帯で時間を確認したら、

本来乗るはずだった電車が来るまでは三十分もあった。

気温はとうに三十度を超えていた。ホームには幾つかの椅子があり、簡素な屋根もついているが、この暑さを幾ばくかは防いでくれるもの、足下からは熱風が舞い上がりてくる。こんなことなら、多少恥ずかしくとも最寄り駅で大人しく待つて直通電車に乗れば良かった。後悔しても既に遅い。

大きな溜息をついたその時、ハツとした。眼前に伸びた線路の上をトンボが一匹、仲良く戯れるように飛んでいた。午後の陽射しが真っすぐに続くレールを銀色に鈍く光らせ、一匹のトンボたちはそのまま舞っていた。

何とも心和む光景に、頬が自然と緩む。すると、サアーツと涼やかな風が私の側を吹き抜けていった。切つけたばかりの短い髪がわずかに暑さを孕んだ風に揺れる。

私はベンチに座り、バッグから持参した本を取り出した。本のページをめくつてみると、今度はジージーと夏虫の声が響いてくる。駅の周囲は田んぼが多く、私の背後に青々とした田園風景が広がっている。ふと見れば、ベンチの後ろの柵の向こうには、グラジオラスらしい夏の花が群れ咲いていた。鮮やかな黄色の花が夏の太陽に負けないくらい眩しい。

もし途中下車することがなければ、当然ながら、これらの素敵なお風景を見ることはできなかつた。寄り道というと、無駄脚を踏むというイメージがある。けれど、時には寄り道も良いものだと、明るい陽射しの下で咲き誇る花たち眺めながら思つた。

三十分後、私は再び車中の人となつていた。ほんの些細な何気ない光景、ささやかな出来事だ。しかし、それが私には、その日、神様から貰つたサプライズプレゼントのように思えてならなかつた。

## 子育て同志

石垣明美

二十五年前の春、三人の幼子を連れて、家族で大阪から岡山に引っ越してきた。引越しの日は雨。マンションには人気なく、道にも人がいない。人はどこにいるのか。

数日後には幼稚園が始まり、近所の家族との交流も始ましたが、大阪での暮らしに比べればさみしいものだつた。それでも育児に追われながら日々は過ぎていった。

その年の冬、ベランダで洗濯物を干していると、カラスたちが目の前を、上から下へと飛んだ。さらに見ていると、数十羽はいるであろうカラスたちが、マンションの屋上から前の林に向かって、次々に滑空していく。遊んでいるの？私はにわかに興味を抱いた。

それからひと月、カラスたちは群れることをやめ、一組の夫婦が前の林で巣を作り始めた。一方私は、長男は幼稚園、長女は近所のお友だちとままでこと、二女は私の背中におんぶ。自分の髪をとくゆとりもない日々であったが、ベランダの横を通るたび、カラスの夫婦のことが気になるようになっていた。もつとよく見るために、夫に中古の望遠鏡を買ってきてもらひベランダに据え付けた。

やがて巣が完成し、一羽が巣に座り続けるようになった。

卵を産んだのだろう。そんなある日、カラスのあわてた鳴き声がした。巣の横にカラスより少し大きめの鳥がとまっている。図鑑を手に望遠鏡をのぞく。オオタカだ。これは大変！カラスの夫婦は声を出し、旋回し、タカを脅かそうとしている。タカは身じろぎもしない。長男の幼稚園のお迎えの時間が迫ってきた。観察を中断し、娘二人を連れて片道三キロの道のりを自転車でかつ飛びだし、お迎えに行つて帰つた。オオタカはまだいた。それから小一時間、タカは卵には手を出さず、西の空に去つていった。よかつた。

木々の新芽が膨らんできた頃、雛が生まれた。夫婦は怖い敵の侵入を防ぎながら餌を調達しなければならない。望遠鏡のむこうに見える夫婦の顔は眦を決しているように見えた。

ある冷え込んだ日の明け方、カラスの夫婦が激しく鳴きわめく声に私は飛び起きた。

今までで最上級の危機だと感じた。夫婦は木の根元に向かって急降下と上昇を繰り返していた。望遠鏡をのぞくと、朝もやの中、タヌキが木に登り始めていた。私は手に汗を握つた。鼓動が高鳴つた。数分後、タヌキはあきらめて木を降りて行つた。心底ほつとした。

それから雛はすくすく育つて、巣の外に出るようになり、やがて飛べるようになり、新緑の頃には家族で出かけるようになつた。

懸命に子育てるカラスの姿は、育児に自信を失いかけていた私に勇気を与えてくれた。心が折れそうな時も、カラスを見て自分を励まることができた。もはやカラスは同志であつた。子ガラスたちが親離れして再び群れる頃には、私も岡山の暮らしに慣れた。ご近所さんとも楽しく話せるようになった。

カラスの夫婦さん、ありがとう。できることなら我が家にお招きして子育て談義がしたかったです。

## 鍋を磨く

江国千春

物にも心がある、と感じたことはあまりない。電気製品は年数がたてば買い替える。服はサイズが合わなくなれば処分する。

よく使っていた小さめの片手鍋を焦がしてしまった。重くて使いにくいので、不燃ごみに出して安くて軽い鍋を買おうと思っていた。

そんな時、田舎に住む母が遊びに来た。いつも畠仕事をしているせいもあるのだろうか。久しぶりに会う大柄な母は以前よりも背中が丸くなり、小さくなつた。手料理をたくさんご馳走した後しばらく話をした。母は、「お茶碗ぐらい洗つとくわ」と言つて、洗い場に立つた。私は母に任せて食卓に座つていた。「この鍋、真っ黒じやが」という声がした。しまつた、隠しておけばよかった、と後悔した。母は「外国製で五層構造になつているから高かつたのに」と言つて、たわしでこすり始めた。「えつ、そうだったの?」私は捨てようと思つていた自分の心を恥じた。

私が子どもの頃、母はよく割引品を買つてきては「これ安かつたんよ」と喜んで見せてくれた。その鍋も安物だと思い込んでいた。

結婚前、仕事で忙しかつた私の代わりに、母は日用品を少しづつ揃えてくれた。あの鍋は五個セットの中の一つだつた。特大の深い両手鍋は四人家族のカレーやおでんを作るのに重宝した。浅い両手鍋で鍋料理を作り家族で囲んだ。熱伝導がいいのか、すぐにお湯が沸騰して冷めにくく。大きめの浅い片手鍋は魚の煮つけ用だ。ゆつくり冷めるせいか、味がよくしみる。三十年使っていても、取つ手が壊れていらない。節約家だった母が、私のために高価な鍋のセットを買つてくれていたことを、今になつて知る。

母が帰つた翌日、磨き粉を買ひ、たわしで磨いた。おかげはすぐには取れなかつたが、毎日磨いていると、だんだん底が見えてきた。

この話を知り合いのSさんに話した。彼女は母よりも三歳年上の八一歳。白い髪をきつちりと結つて小柄な体に和服をまとい、背筋を伸ばしてさつそと歩く。身に着けている物は、ほとんどが三十年以上も昔の物だという。着物や服はサイズを直したり、裏布を新しいものに替えながら大事に着てている。帯をほどいてバッグやお琴のカバーにすることもある。お気に入りのピンクのパンプスは底を修理して表面を磨いてもらひ真新しくなつたと喜んでいた。彼女は優しく微笑みながら言つた。「そういう時はな、『お母さん、ありがとう』って言いながら感謝して磨くんよ」

彼女の言葉を聞いて、はつとした。これが物にも心がある、ということなのだ。そういえば、きれい好きの母は実家でも良く鍋を磨いていた。父とケンカした時は泣きながら磨いていた。

「お母さん、ありがとう」と言いながら磨かれた鍋は、見違えるように輝きを取り戻した。

磨いているうちに、私の心の中の雜念や屈託がいつの間にか消えていくのを感じた。

## 人生漫遊記

出戸 真喜子

家族について話すことが苦手だ。自分の未熟さを叫ぶような恥ずかしさを感じる。しかし、家族といえども別人格。一度くらいなら彼らへの気持ちを記してもいいのではないか。思い切れるときに書いてしまえ。私の人生のあるときから順に現れ、山も谷も、波も、共に越えて来た子どもたちは成人と呼ばれる年齢を過ぎた。実は私、心中で彼らを、スケさん・カクさんと呼んでいる。あの長い旅のお供をする、助さんと格さんに名を借りた。しかし、彼らは決して剣豪でもなければ、切れ者というわけでもない。ではどういう者なのかを顧みてみた。

スケさんは、私にとって「窓を開ける人」である。私に、次々と窓を作つては開けていく。新しい風が情報が、びゅうびゅう入つてくる。開かれた窓のそれぞれに、私の知らない景色が広がり、素早くめぐられる紙芝居のように、勢いよく場面は変わっていく。私にはその一つ一つを鑑賞しているゆとりはない。半ば目を回しながら、そのめまい感覚を楽しむのが正しい鑑賞法だと気づいた。

一方、カクさんは「遺失物係」だ。私の落としもの、忘れものなど、もう失つてしまつたと思われるさまざまものを拾つて届けてくれる。実行できなかつた計画。習得したかつた技術。それらをできなかつた言い訳と弱さ。後悔や自己嫌惡の垢にまみれている記憶を、彼は拾つて少し垢拭い、そつと手渡してくれるのだ。私は、やり残してきたことを再びやつてみよう、垢を落としてみよう、という気持ちを呼び起されれる。やり直す気力を与えられるのが嬉しい。

そしてもう一人、彼らより少し前から共に旅を続ける八兵衛さん。甘いものが好きで、おつちよこちよい。時には事件の火種を拾い、時には解決の意外な糸口にもなる連れ合い。「うつかり八兵衛さん」と私はこつり呼んでいる。

ところで、黄門様は誰なのか。実際、この旅に威厳ある「老公様は見当たらない。では私はいつたい何者だろう。よくよく眺めてみれば、私も甘い物好きでおつちよこちよいの八兵衛ではないか。何のことはない。この旅は少々せかせかスケさん・少々のんびりカクさんと、うつかり八兵衛ふたりの迷い旅だったのだ。迷いっぱなしのだから、口げんかも、山のような失敗や顔から火が出る勘違いもあって当然。愛おしい思い出である。

さて、この旅の行く末が一本の道のように見えて来たところで、今まで旅のお供となつてくれたことに、一旦感謝の気持ちを渡したい。ここらが旅の分岐点だろう。私には解説できない地図を片手に、若者は自分たちの旅路を生きていくのだ。達者でな。旅立ちを見送る側になり感傷に浸りかけて横を見れば、甘い団子を頬張る八兵衛さん。団子が丸々と並んだ串を私にも一本手渡してくれる。私はもう一人の八兵衛として黙つて受け取り、頬張る。八兵衛一人の漫遊は、まだまだ続く。

## シユーズの独白

藤井信哉

優柔不断な私の主人は、私を選ぶにも仲間十数足を集めて「あーでもない。こうでもない」と片つ端から履いてみる。迷いに迷った挙句、私が最終的に選ばれた。

初仕事の日、見るも無残な前任者が恨めしげに私をちらりと見る。主人が私の踵に靴ベラを入れながら、「おー、こりや履き心地がええぞ」と言う。前任者が少々嫉妬したようだ。両足に私を入れるや否や主人はウォーミングアップもほどほどに、あつという間に表へ飛び出した。

後期高齢者と思えぬ身のこなしである。と思った瞬間、右足の靴先が何かに躡いて、主人は大きく前につんのめる。平素の運動の成果か、「おつとつと」と足を細かに前に繰り出し転倒は免れる。主人は振り返り、躡いた原因なる物を探すが、それらしき物はない。シルバー川柳に「躡いて足元見れば何もない」「躡いて何もない道振り返り」等という句がある。まさに主人の躡きは歩き方が悪いのであるが、主人は私の所為にして靴に文句を言うのである。「良うねえなあ、この靴あー」と言いながら、初めて足を入れた靴の不備を確かめる。ウォーキングの同僚のリュックサックや帽子、歩数計などなどは一度も文句を言われたことはない。ウォーキング歴二十年の主人は、一時は日本ウォーキング協会の指導員を目指して公認のコースを多数歩き、学科講習も受けていたのである。歩き方の基本は踵から着地して親指の付け根あたりでキックする。足腰が弱って来るとつま先が上がらない。つま先から着地するため、躡くのである。自分の足腰の衰えを靴の所為にする主人が憎たらしい。しかし、そこは主従関係の悲しさ、主人の意向を忖度し、出来るだけ主人の歩き方の欠陥は、私の方でサポートしなければならない。

夏のウォーキングで嫌なことは、時折ヘビに遭遇することである。元来、近眼で最近は白内障も進んだ主人はヘビの出現に寸前まで気づかないことがしばしばある。ヘビにいち早く気がついた私は、急ブレーキをかける。それに気がついた主人はヘビとにらみ合う。ヘビ年の主人でもやはりヘビとは相性が悪いらしい。ヘビを避けて遠回りに私の向きを変える。私がヘビを蹴飛ばしでもしようものなら、即お払い箱だ。その日は運よくヘビが道端の雑草の中に逃げ込み事なきを得た。

私のデビュー初日から事件が起きたが、いつ主人が私に愛想をつかせてお払い箱にされるかわからない。が、主人が私を可愛がってくれる限り、主人の健康長寿に尽くしたいと思う。それが私の生きがいである。また、主人の生きがいのひとつでもある老人会の運営に精力的に取り組むことが出来ればこれ以上の喜びはないのである。ところが、ここ二～三日主人は現れない。漏れ聞くところによると検査入院をしたらしい。主人の無事のご帰還を祈るばかりだ。